

方向

第一〇七号 一九八九年二月五日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

仏教音楽をめぐって (上)

1988.7.14. 本法寺で 原田 憲雄

はじめに

ただいまご紹介いただいた妙徳寺の原田憲雄です。布教についての知識も経験も浅いわたくしが、講師として皆さんの前でお話いたしますのは、たいへん面はゆいことです。幹事の方から出された問題は「仏教音楽」です。わたくしは、音楽一般についても、仏教音楽についても、くわしいことは知りません。それで、お断わりしたのですが、幹事の方がおっしゃるには、「あなたは詩のようなものを作ったり翻訳したりしているではないか。詩は言葉の音楽だから、仏教音楽についても何か考えがあるだろう。それを話せばよい」ということです。たしかに、詩は言葉の音楽といえましょう。しかし、詩には詩の分野があり、音楽には音楽の分野があります。二つはかなり親しい間柄ではありませんものの、それぞれの分野には違った法則が働いていて、詩に親しめばそれで音楽のほうのことなんでも分かるというものではありません。説教の達人が、かならずしも梵唄について知っていると限らないようなものです。わたくしは詩についてはいくらか研究もし、実作もしていますが、音楽は、ほとんどのんの訓練も受けておりません。

ただ、音楽を聞くことは好きであり、いわゆる仏教音楽をたびたび聞き、わたくしの詩のいくつかが作曲され、

「仏教音楽」として発表されたこともあります。それで、いろいろな感想が浮かび、こうすればどうか、あのようであってほしいといった願ひも湧いてきます。そういうことをお話ししてお役に立つことができるなら、むげにお断わりするのもどうかと存じます。幹事の方も「それでよい」とおっしゃいますので、お引き受けした次第です。従って、題には「仏教音楽」となっていますが、正確には「法華経」を信じるひとりの僧の仏教音楽をめぐる随想」というぐらいのところですか。お聞きくださる方々は専門的な話を期待しておられることと察しますが、初めに事情を申しあげ、お許しをねがいます。

「法華経」と音楽

「法華経」の「法師品」第十に、

薬王よ、どんなところであろうと、この教えが、説かれ、読まれ、誦えられ、書かれるところ、あるいは書物の形にまとめられたこの教えのあるところには、きわめて高く、広く、麗しい七宝の塔を建ててがよい。そこには如来の遺骨を安置する必要はない。なぜならそこには、すでに如来の全身があるからだ。この塔を、あらゆる花や、香や、瓔珞や、絹の天蓋や、旗や、はたほこや、歌曲や、器楽や、舞踊によって供養し、敬い、尊び、ほめ讃えるべきである。

と示されています。「法華経」を信じる人は、「法華経」を読み、誦え、解説し、書き写すだけではなく、「法華経」に会いえた感動を、詩や歌につくり、楽器をとって演奏し、声をあげて歌い、手足をうごかして踊らなければならぬのです。また、ここに引くことは省略しましたが、絵画、彫刻など、すべての芸術活動がともなわ

なければならぬことが、さし示されています。そのような芸術活動のすべてが、仏を讃え、法を称えることになるのです。また、「方便品」第二には、

もし人が、もっとも高くすぐれた覺りのために、音楽を演奏させ、みずから鼓をうち、角笛や法螺貝を吹き、簫や笛、堅琴や大小のシンバルなど、さまざまの妙なる音をことごとく鳴らして供養するならば、かれらはすべて覺りを得るであろう。あるいは歓喜の心でもって仏の徳を讃える歌をうたい、または仏の遺骨に供養するために一種類の樂器を鳴らすだけでも、かれらはみなこの世で仏となるだろう。

と説かれています。ここでは音楽演奏そのものが、仏となるための修行だとされています。ではなぜ音楽が『法華經』においてこのように重んぜられるのか。わたくしは、それを歴史的側面、心理的側面、そうして『法華經』そのものの観点から、考えることができようかと思えます。

歴史的側面から考えられることは、音楽はその発生の初めから宗教と密接に結び付いていたということです。宗教はもと社会的・集団的なもので、宗教行事は集団行動です。多人数が同じ宗教感情をもち、そろって呪文・祈祷・讚美の言葉を唱えますと、言葉の高低・遅速が生じます。すなわちリズムやメロディーが生まれ、これらの唱えごとは長いあいだに意味が分からなくなり、単なる唱えごととして歌われるに至るのですが、このようにしてリズムやメロディーが言葉から分離したとき音楽が生れた、というのが、音楽起原説のうち古くから有力なもので、これは信ずべきかと思えます。他に説はあっても参考的なもので、大筋はかわらないでしょう。

初期の仏教教団では音楽・繪画・彫刻などいわゆる芸術が禁ぜられていたといわれます。これは、釈尊が、弟

子となったピクたちに、修行に専心させるため、世俗や他の宗教の芸術とのかかわりを禁じたもので、ピクにならない在俗の信者にまで禁止したのではないでしょう。それにしてもピクたちには禁止された音楽などが『法華經』で讀えられるのはなぜでしょうか。それは心理的側面から考えるとき明らかになるでしょう。

言葉から分離したりリズムやメロディーは、宗教からも分離するかという点、そうではなく、呪文や祈祷文としてもついていた宗教感情の内容を象徴する力を保ち続けて失わないのです。これがわたくしの申し上げた心理的側面とかかわります。ショーペンハウエルは『意志と表象としての世界』で、

音楽は意志のうえに、すなわち聴く人々の感情、情熱、および激情のうえに直接に働きかける。そうしてその音楽は、それらの人の感情をすみやかに高め、あるいはその気分を激変させる。

といっていますが、その直接の働きかけ、人の感情・気分を激変させる力は、音楽が言葉から分離して後も保ち続けている宗教感情に由来する象徴力によるのでしょう。音楽にこのような力があるとすれば、仏教教団も、ピクの修行に主力をそそいだ初期においてはともかく、在俗の信者はもとより、他の宗教・信仰をもつ人たちにも道を伝えはじめた大乘教団の人々が、この有力な方法に目をつけるのは当然でありましょう。まして人間の心の変革をめざす『法華經』がこれを重んじないはずがありません。

つぎに『法華經』そのものの観点からながめてみます。『法華經』は、その構成が劇的である、といわれます。最初に指摘したのが誰かは知りませんが、和辻哲郎氏にも同様の発言があります。じじつ『法華經』を読みますと、いくつもの物語を組み合わせ、一つの物語はその発端から一つの主題を追って進み、頂点に達し、終結し、

ついで次の物語に入り、新しい主題を追いながら進み、頂点に達し、終結し、；そんなふうには繰り返しながら全体は、個々の物語の主題を総合する大きな主題を追求して進展します。そうしてそれぞれの部分は、散文と詩から成り立っていて、ワグナーの長大な歌劇を聞くような感じがします。『法華経』は中国の教学者によって序・正宗・流通の三つの部分に整理されましたが、三部からなる劇のような形式に成立した『法華経』としては当然のことです。江戸時代の学者に、『法華経』は講談みたいではかばかしいと悪口をいったひとがいるようですが、歌劇でも、能楽でも、初めからしまいまで注意深く見て、構成を綿密に考えなければ、その意味は掴みにくいものです。『法華経』は、発想からして音楽的であるので、論理的な分析だけでは理解が深いところに達し得ない。芸術的な直感によって把握しなければならぬ教えなのです。『法華経』が形式においても精神においてもきわめて音楽的なのは、生命の神秘を表現するため、おのずからこのような構造となったのでしょう。いずれにしても、そのような『法華経』が音楽を重んじるのは、当然のことでありましょう。

伝承と創造

わたくしたちの先達は、『法華経』と音楽との関係を理論的に追究することはされなかったようです。しかし直感的にさとり、実行にうつすことは怠っておられません。げんにわたくしたちも、お経に節をつけて誦え、梵唄で仏・法・僧を誦え、鐘や磬をうち、鐃・鉦をならし、太鼓をたたき、笙や箏を吹いています。ただ、わたくしたちがもっている音楽はそのほとんどすべてが、五百年か千年のむかしに、わたくしたちの先達が苦心して発明された音楽であって、われわれはそれをおうむがえしに繰り返しているにすぎません。わたくしたちは先達

のあつい信仰が見出した音楽を正しく受け継ぎ、次の時代に引き継ぐ義務があります。さきほど三原英応上人のご指導で声明の講習がありました。これはそうした尊い意義をもつわざだと信じます。

だが、わたくしたちは、先達の遺産を伝承すると同時に、みずから『法華経』に会いえた感動を、新しい詩歌に、音楽に、舞踊に、作り上げなければならぬのではありますまいか。

いまわたくしたちの習っている梵唄や雅楽は、幼稚なものでも単純なものでもありません。むしろ複雑微妙なものといつてよいかと思えます。けれども複雑微妙だから、それを繰り返していたらよいということはありません。もし一つ優れたものが出たら、後は真似ていさえすればよいのであれば、日蓮上人が『法華経』を誦するほかに『立正安国論』を書き、『開目鈔』や『観心本尊鈔』を著わされる必要はなかったでしょう。法は一つであつても、いただきかた、味わいかたはさまざまでしょうし、またそうあるべきはずです。だからこそ天台大師は『摩訶止観』を述べ、伝教大師は『山家学生式』を撰ばれました。わたくしたちが『法華経』を読んで感動するならば、そこから詩歌が生れ、音楽がほとぼるはずで、もし何も出てこないとすれば、わたくしたちの、『法華経』の読みかたが間違っているか、歓喜の心が足りない、ということになるのではありますまいか。この言いかたが誤っていないなら、日蓮宗が、先達の作られた梵唄や雅楽のほかになんの詩歌も音楽も生み出しえていないことは、わが宗門全体の信仰が不十分であり、行学二道への励みが足りないことになる、とわたくしは反省いたします。

宗祖日蓮上人の仏教批判は教・機・時・国・序の五義の教判に示されています。五義のうち、「時」の重要性

の指摘、すなわち時代によって教えの内容も形式もただしく選択されなければならぬという点は、宗祖が特に苦心し発明されたところだそうです。だとすれば、宗祖の時代からすでに七百年たった今日のわたしたちは、『法華経』の読みかた、解釈のしかた、伝えかたにも、宗祖のなさりかたとは何らかの違いがなければならぬはずで、もし宗祖のなさったやりかたを墨守するとすれば、一見宗祖に忠実であっても、じつは宗祖に背いていることになりましょう。わたくしたちの『法華経』を称え、仏を讃える歌も、先達の真似をしているだけではだめで、おのれが『法華経』から得た喜びに形を与えなければなりません。さらに、「時」について深く考察し、二十世紀後半のこの地球上で、いかなる詩歌、いかなる音楽を生み出すべきかを、思わなければなりません。

第二次世界大戦を契機として世界はおおきく変りました。変化のもっとも大きなものは、世界がひとつになつたということです。東洋と西洋が、北と南が、たがい他に無関心ではありえなくなつたことであります。音楽については、まず楽器がいちじるしく豊富になり、世界の音楽史に出てくるほとんどすべての楽器がどこでも使用され、さらに新しい楽器が出現しています。日本で西洋の楽器が使われるのはいうまでもありませんが、欧米の交響楽に、木魚・磬・拍子木などの用いられるのがその一例です。また地球上のあらゆる地域・民族の、リズムもメロディーもハーモニーも収集し、研究し、作曲にとりいれられるようになりました。アメリカのジャズやタンゴに日本のバカバヤシや八木節のリズムやメロディーが混じっていたり、日本の民謡がスイムやモンキーダンスに合うように編曲されていることは、ラジオやテレビを聞いているとよくわかります。宗教音楽は世俗音楽から豊富な養分を吸い上げ、世俗音楽は宗教音楽から高い精神性を得、器楽も声楽も、世界のあらゆる形式をお

のれのうちに消化しようとしています。

ところで、目を日蓮宗の音楽にもとしますと、七百年という時間がほとんど経過していかないように感ぜられま
す。まるでエアポケットのように時間の消滅した世界が残されています。キリスト教音楽のたえざる進歩を見て
いますと、これはなんとも残念なことであり、音楽なんぞはわれわれの関するところではない、というよう
な言葉を『法華経』を信ずる者が口にしえないことは、初めに引いた『法華経』の一節からして明らかです。

現状を嘆いていても仕方ありません。わたくしたちは痛切に反省し、そこからどうすればよいかを考えなけ
ればなりません。それには、われわれがみずから詩を作り、音楽を作ることから始めるより道はあるまいと思
います。もとより最初は、幼稚でへたくそなものしか出来ずまい。幼稚でへたくそなものでも、無いよりあるほ
うがましです。とにかく作り、それを積み重ねてゆけば、作る過程でえた反省や研究が、次のよいものを育てま
す。まず種をまいて、土をたがやし、雑草を除いてゆくのです。

仏教教団のなかでも、真宗、浄土宗、天台宗は、かなりはやくからそれをやってきました。十九世紀の末
から西洋音楽の形式の上に発展してきた仏教讃歌は三〇〇曲に近いものがありますが、その大部分は、これら
の宗の人たちによって作られたといつてよいでしょう。もとよりキリスト教音楽には、質量ともに足許にも及び
ませんが、しかしなかには内容、形式ともにずいぶん複雑高度のものも生れています。そうしてそのような努力
の持続のなかから宗門全体に音楽を尊重する伝統がたちかわれ、専門の詩人や音楽家が出てくるまでになりまし
た。長田恒雄、清水脩などの諸氏はそうした人達なのです。

ひるがえってわが宗門には、讃仏歌をつくる詩人も作曲家もあまりいないようです。及ばすながらわたくしなどもいくらか努力して讃仏歌を作ろうと念願していますが、その作品を他宗のひとたちが作曲したいといってくるが、本宗のほうから求められたことは一度もありません。

と も か く 作 る

話は横道にそれますが、本宗では、僧侶が葬式・法要・宗門政治以外のことにかかわっていませんと、奇異な目で見られる傾きがあるようです。寺院の子弟は立正大学に入り、宗学を専攻し、卒業したら寺に帰るか宗務院にはいり、しばらくたつと宗会議員に立候補するか、由緒寺院の住職になる運動をする。これが僧侶のオーソドックスな進路であるかの観があり、そういうコースの志望者には奨学資金なども出ているらしいが、国公立か、他宗立の大学で学び、音楽や美術や文学をやったり、その他、医学、建築、放送、演劇などの方面で働いていると、寺の息子のくせに、と異端視されるようです。また寺の住職になっても、教員や、公務員や会社員になったりしながら貧乏の維持と宗門外の布教に苦勞してきますと、副業僧侶といって軽蔑され、そういうものは絶滅させよう、といった声が飛び出したりします。「随喜功德品」第十八に、

アジタよ、如来がこの世を去ったのちに、僧であれ、尼であれ、信者の男であれ、女であれ、それ以外の智恵ある大人であれ、子どもであれ、この経を聞いて随喜し、教えの集いから出てよそにゆくとしよう。僧房、

山林、都市、町村にゆき、聞いた通りに、父や母や親戚や知人のため、その人の力に依じて説いたとしよう。これらの人が聞きおわって、また随喜して他の者に説くとしよう。この第五十回目のりっぱな男女の随喜の

功德は：無量無辺でくらべるものはないのだ。

と説かれています。この言葉が偽りでないなら、宗門という「教えの集い」の外で『法華経』の一句を語る事が、宗門の中に閉じこもっているよりよくない随喜の仕方だ、とは言えないだろうと考えますが、副業僧絶滅論を説く方々は、別になにか確かな根拠をお持ちなのでしょうか。

カトリックでは僧侶のなかからさまざまな技能者を養成し、葬式・法要以外に特殊な技能をもたないものは僧侶としての資格が与えられないということを知っています。また労働司祭というものもあり、一労働者として各企業の労働組合にも入り込んでいるそうです。

キリスト教音楽が、世界の音楽のもっとも大きく、広く、深い潮流をなしているのは、教会がみずから、人間のすべての問題はじぶんの問題だと考え、人間世界におこるすべてのことに対応しうる技能者・職能者を養成してきた結果の一つにすぎません。いまのままでゆきますと、日蓮上人の「一天四海皆帰妙法」の格言は、本宗のものではなく、カトリックのものになってしまいはせぬかと、はなはだ惜しまれます。

音楽では、作曲、演奏ということが大きな問題で、声楽であれば作詞、歌劇であれば脚本の作成がともないます。これを専門の作曲家、演奏家、詩人、作者に依頼すると、その内容や形式によって差はあるにしても、相当の費用がかかります。相当の、といっても比較の問題で、京都のある由緒寺院の境内地売却には数億の金がかかっているようですが、そんなにあれば、シンフォニーや歌劇の一つや二つはつくって、何十回も演奏できるはずですが、金を動かさうる人は、選挙や、訴訟や、飲食や、自分のPRのためには惜しまれなくても、音楽に金を使おう

うとはされないようです。かりにお金が出、職業音楽家に頼むとしても、音楽家で『法華経』を一度でも通読したという人は少なく、仏教に関心も持たない人に作ってもらったのでは、どうしても癢いところに手が届かぬものが出来てしまいがちです。

だからといって、手をこまねいては、いつまでたっても何も生れてきません。けつきよく、さきほど申しましたように、わたしたちの幼稚な手でもって、ともかく作れそうなものから作ってゆき、作ることによっておのれの技能を高めてゆく。そのような同士を一人でも多く見つけ、たがいに励まし合いながら、一つ一つ積み重ねてゆく。さいわいに世間でいくらかその作品に注目するようになれば、今度は宗門の政治家が、あわてて利用しようとなさるでありましょう。ここらがまあ、いちばん早道であるように思われます。早道といっても今のわたくしたちが生きているうちにそうなるなどと期待しないほうがよろしい。だいたい、宗教とか教育とか、すべて精神に関する問題は、すぐに成果を見ようというせっかちな根性でやるべきものではありません。

へ※これはいまから二十三年前の夏、京都の日蓮宗の僧を対象とする講習会で話した原稿で、後に求められて半分ほどに縮約したものを雑誌『求道』に寄せ、第九八、九九号に載った。物置で埃にまみれていたのを読み返し、若いときの気負った物言いが恥ずかしく、時代も移ったなあと思ったが、事柄としては、部分的には、今でも通る意見だろうという気もせぬではないので、話の原稿のほうを二回に分けて掲載することにした。へ

※前号正誤 九頁一二行 髪をいつまで青々させておけようか ↓ 髪におく霜いつまで留めておけようか

水はひかりながら

川巾いっばいに流れていた

遠くの対岸には

銀の波うつスキの穂と

セイタカアワダチソウの黄色い花

山の上へと棚田が続き

刈り取られた稲は

はさに掛けられて熟れていた

道は橋を渡って曲りながら

登ってゆく

山裾の農家には庭いっばいのコスモス

三角形にとがった杉が

足をそろえて並び

屋根のまわりで竹が

大きく揺れている

風が吹いたので

ネムの木の白鷺は

羽根をばさばさやり

川の中では針のような黒い魚が

まっすぐ泳いで止まった

陽は明るく

空は青々と晴れ渡り

音は消えて

人は空をゆく鳥

この風景の中になにか

自分から動いていると思える

ものがあっただろうか

赤い帽子と赤い靴と

あなたはわたしたちの思い出の

中から来たように若く

息子たちを旅立たせて

なにほどのこともなさそうに

あのころと同じだ

「ああなんていいんでしょう

暑いくらいの上天気だし

これは何と行ったかしら

そうそう葛ですわウサギが

よく食べるんです」

などと言っている

蔓草がはい出し葦が

紫色の花をなびかせ

行く道をさえぎる

わたしはあなたの後にいて

ずっとどこまでも歩いて

ゆきたいと思っていた

ふとあなたが振り返った時

そこに誰もいなかったとしても

すこしも不思議でないほどに

すべてが

自然だったから

バスに乗って

いくつも停留所を過ぎ

終着に近いころ

「川が合流しましたよ

席がはんたい側で

見えなかったでしょう」

とあなたが言った

川はそこから方向を変え

わたしたちを置いて

流れていった

人はかつてこのような

国からきたにちがいない

輝く芳野川の流れと

丘陵のやさしさが何しに

ひとびとがこの世界に來たのであったかを

もういちど思い出させてくれた

宇 太 水 分 神 社

1989. 11. 20.

原 田 慶

うだのみくまりじんじや、と読む。

奈良に住むKさんとふたりで十月の初め、この神社を訪ねた。水分神社の案内は、早くに室生村向淵・正定寺の東森善城氏にいただいていた。

一、『宇太水分神社のしるべ』 水分神社刊。

二、『近鉄沿線風物誌、歴史七、水分』 昭和三十八年 近畿日本鉄道刊。これは当日、榛原（はいばら）の駅で出会った人が「よくこんなのが手に入りましたね」と驚いた冊子であった。

三、『奈良県の歴史散歩（下）』 奈良歴史学会編 の中からの宇太水分神社の項のコピー。

これだけの資料を何度も読んで、いつか行ってみようと思いを待っていた。ちょうどKさんが、どこかへ歩きに行こうと誘ってくれたので、宇太水分へ行ってもらうことにした。『奈良県の歴史散歩』によると、

宇太水分神社は宇陀郡菟田野町古市場にあり、水分（みくまり）とは「水配り」で、水の調節・配分を意味し、水源地信仰のシンボルだ。大和には山地（水源地）方面に水分と名のつく神社が数多くある。なかでも有名なのは、宇太（菟田野・うたの）・葛城・吉野・都祁（つげ）の水分神社で、大和のほぼ東西南北の四方に位置している。古来水は農耕ともかわって神聖視され、その清浄な水を古代の人々に分与してくれる神として、山の奥地の川上に水分神社がまつられた。そして現在でも、農耕の守護神として崇拝されていると書かれている。

近鉄京都駅から橿原神宮行き急行に乗り、八木で大阪線に乗り換えて橿原まで行く。ここまでで、二時間近くかかる。橿原からはバスが出ていた。平日だったのでバスの乗客は土地の人がほとんどで、写真を撮りに行くという若い人がひとりいて、この辺をよく知っているらしかった。

バスは町を出て宇陀川を渡るとすぐ登りになり、坂を上って芳野川の傍へ出た。木綿（もめん）橋という停留所があり、田の中の道を芳野川に沿って少しずつ登って行く。山間に田畑や村が広がる秋の風景の中を、客を降ろしながらバスが走って行く。乗ってくる人は時たまで、一人、二人と降りる。一度にたくさんは降りることはなく、ずっと奥まで行く人も多いらしい。

芳野川は「ほうのがわ」と読み、川中は広くて、水はいっぱいにひろがって浅く流れている。橋がいくつも掛けてあり、バス道路の向かい側の方にも村が開けている。山がせまっているところでは傾斜地の田も段をなして作られていて、土手が高く、そこをおおっているススキ、セイタカアワダチソウの、色合いが美しい。農作業も

ゆっくり進んでいるらしくて、稲がよく実り、刈り取られたものは長い竿を渡してさかさまに掛けられている。わたしの村ではこれを「はき」と呼んでいた。

美しい農家が道のすぐ傍にあったり、ずっと高い所にあったりするが、それぞれのたたずまいがとても明るく、きれいに整っている。

上伊足（かみいだに）、池上、高塚、比布（ひふ）、母里（もり）などという停留所の名まえもめずらしい。久し振りでほんとうの自然にふれたような安心感に、深々と浸ることができた。

水分大橋を渡って、古市場水分神社前でバスを降りると、いつの間にか川巾が狭くなり、流れも細くなっていた。

古市場は、宇陀から桜峠をこえて奥吉野の鷲塚（わしか）に通ずる街道沿いであり、大和の奥地と表の野とをとりもつ物資交換地としてスタートした町で、昔は宇陀西殿庄と呼ばれた所である。

と『風物誌』にある。

橋のたもとに立ってみると、大きな倉を並べた家や銀行なども見える。人影はほとんど見えないけれど、

「ここはやっぱり町なんですわ。あれは造り酒屋さんでしょう、きっと。水のきれいな所ではたいいお酒を造っているやないですか」

とKさんが言った。ずいぶん大きな家、りっぱな屋敷がある。

芳野川に沿って水分神社が三社あり、奥の宮（上水分）は、古市場から芳野川に沿ってまだ六キロメートル近

くさかのぼった上芳野に、総社芳野宇太水分神社があり、上の宮（中水分）がここ古市場にあつて、式大社宇太水分神社という。ここから六キロ川下の、わたし達がバスに乗った地点、横原町下伊足（しもいだに）に三つ目の宇太水分神社（下水分）が祀られているということである。下の水分神社の入り口は、バスの中からもみるこ
とができた。

停留所から少しバスの行った方向に歩くとみちの左側に大きな赤い鳥居が立っていた。そこから左前方へまっすぐ、やや下った所にスギやヒノキの森があり、やはり赤い二の鳥居が見える。その道へ入って行って、狛犬の
にらんでいる二の鳥居をくぐつた。手を洗って拝殿に行く。わたしはどこでも手を合わせて拝むが、Kさんは柏
手を打つ。

「ああ気持が良い、久し振りに手を打って神様を拝みましたわ。わたしの里は神道なんですよ、何でも神様な
んです。お葬式でも。母がなくなつた時も神様でした」

「天皇家のようですね。かぎりなんかも神ですか」

「ええそうですね、神棚に神を供えて、なんかあつさりしていて、はでなことはなんもせんで寂しいくらい
ものですよ」

「神主さんがお葬式をされるのですか」

「そうですね。この頃はお葬式を神道でするとこなんてあんまりないから、母の時はまだ神主さんがおられたか
らよかつたけど、あの神主さんがおられんようになったら、どうするんかと思ひよるんですわ」

Kさんのお母さんは、山口県のナベツルの里の旧家の生れなのだそうである。

神社の境内は広く、大きなスギ、ヒノキ、クスなどが茂っていて、奥は山になっている。ちょうど正午に近いので太陽が高く、拝殿の辺りには陽が射していた。拝殿を右へまわって、奥へ行って見上げると、やまを背にして、朱塗りの神殿がずらりと並んでいる。五棟あるが左三棟が水の神様である。

中央が第一殿、天の水分の大神、左へ第二殿、速秋津彦の大神、第三殿、国の水分の大神が祀られている。右二棟は摂末社で、春日神社、宗像（むなかた）神社である。ずっと高くなっている神殿を、やはり朱塗りの垣根が境内からさえぎっているので、中をのぞこうと近寄ると、まるで寄せつけないでおこうとするように、小さなアブのようなハチのような虫がたくさん舞っていて、顔にぶつかってゆっくりみることができない。それでも退いてはまた隙を見てのぞいて、宗像神社の墓股の彫刻の「蟹」を見ることができた。思っていたより小さくかわいらしいものだった。これらの朱塗りの神殿は、わたし達にはよくわからないが、資料によると、第一、二、三殿はそれぞれ一間のひろさで連社形式をとり、隅木入りの春日造り、屋根はひわだぶき、とある。社務所へ行ってたずねてみると、神殿の庇の垂木のはしを隅木におさめている典型的な春日造りだそうで、その隅木というものについて教えてもらった。なるほど右二棟の神殿と比べてみると、造りが違うということがわかった。屋根の上に載っているのが「かつお木」かたとたずねたら、剣のようなのが「千木（ちぎ）」で、その根本に横に置かれているのが「かつお木」だと教えられた。いつか柴野純孝さんが書いておられたとおり、鯉に似ている。この華やかな神殿は見あきることがない。

境内のベンチに掛けて、Kさん手造りのお弁当をいただいた。Kさんは三人の子どもを育てあげたベテラン母さんである。

そこへ男の人がひとり近づいてきたので挨拶をして話してみると、榎原から自転車できたということだった。運動のために、ときどき自転車で室生の方にも出かけるのだそうである。何かの話から、その人は、第二次世界大戦で山本五十六の部隊にいたと言った。海軍だが陸戦隊だったので、ずっと中国の陸上ばかりにいたということである。その人が、芳野川は木津川になり、淀川になって大阪湾に流れ込むのだといったので、わたし達は驚いた。その人が行ってしまってから、芳野川は宇陀川と合流して、名張の方へ行くのだから、伊勢湾へ出るのではないだろうか、首をかしげたのであるが、それが大きなまちがいで、地図を調べてみたら、陸の海軍さんが言ったとおり、大阪湾へ行くのであった。

芳野川は宇陀川に入って、室生川など高見山地からの水を集めながら名張川に合流する。名張川は、鈴鹿や布引山地などからの水を集めて来た伊賀川と一つになって方向を変え、京都に入って木津川になる。宇治川、鴨川、桂川などが集まってきた川と合流して淀川になり、大阪湾に入るのである。なんと大まわりしていることだろう。水の従順さとその力の恐ろしさを思い返さずにはいられない。またその水の恩恵をこうむって生きものたちが栄えてきたことは尚更である。米作りを大事に考えなくなっている今、わたし達は水がどのようなものであるかを忘れかけている。

宇太水分神社は、由緒書きによれば、崇神天皇七年二月の勅祭社だという。二千年も昔から祀られていたこと

になるが、崇神、垂仁両天皇は農事を奨励し灌漑に力を入れられたと歴史の本に書いてあるから、水の神を祭祀されたこともかんがえられる。

本殿は、第一殿の棟木に元応二年（三三〇）二月二十三日に上棟されたことが書かれていた由で、六七〇年ほど昔、鎌倉末期の建物だそうである。源頼朝の奉納と伝える石基壇や記念にうえたという頼朝杉などがあり、いつの時代にも大切にされてきた神社であることが知られる。

わたし達が昼食をしている間に、神官夫妻は神殿のまわりの落葉を掃きはじめられた。境内で子どもを遊ばせていたお母さんも帰り、誰もいなくなった静かな境内の空気を十分に味わってから、もう一度神殿を拝して赤い鳥居をくぐり、わたし達も神社を後にした。榛原行きのバスに乗って、途中、高塚で下車、八咫鳥（やたがらす）神社に参拝した。道のすぐ脇に石の鳥居があり、まっすぐ山の方へ上がって行く。その道の両側は五メートルほど下が稲田で黄金の穂が実っている。石段を上がるとそのまま山の奥へと続いている広い境内は、陽が山の向うへ傾いて陰になっていたが、山際には湿地に生える植物がじゅうたんのように広がっていた。上がってきた方角の右手に小高い山があり、神殿はその上に急な石段を上がって行く。わたしが石段を上がって神殿まで行く間、Kさんは下において、何かいっしんにノートしていた。山を少し削って平たくしたところを石垣でかこい、朱塗りの小さな神殿が一棟あった。ここに八咫鳥（武角身命・たけつぬみのみこと）をお祀りしてある。この神社は神武天皇が宮居を定めようと視察された時に、この地の豪族の武角身命が、黒い衣をまとい、木から木へ飛び移るように御案内したので、八尺もある大鳥の意で八咫鳥の称号を与えられた。慶雲二年九月、天武天皇が武角身

命を祭神として、八咫鳥神社を創建して祀ったものである。と神社の説明にある。慶雲二年(七〇五)は手許の年表では文武天皇になっているが、神社の説明の年号が違っているのだろうか。

八咫鳥と呼ばれる武角身命は、京都の下鴨神社にも、その御子神である玉依媛命と共に祀られている。下鴨神社の説明を見ると、

建角身命は、神武天皇御東遷の時、金鷄、八咫鳥となってこれを導き、後にこの山城を開拓して農耕の道を教え、又正邪を糺して裁判の道を開き給うた……

とある。玉依媛命の御子神が上賀茂の祭神・別雷命(わけいかずちのみこと)であるから、下鴨神社は正しくは賀茂御祖(かもみおや)神社という。そして八咫鳥神社もともに葵を神紋とするのだそうである。

八咫鳥神社の境内は高い丘にあるので、稲田や芳野川、家々が下の方に見え、それを越えて、向かい側の山を見ることが出来る。それほど遠くない山々は、親しみをこめて、やさしいたずまいを見せている。神社は、この風景のなかに最もよい位置を占めているようであった。

八咫鳥神社を出て、流れの中が広くなった芳野川に沿って、わたし達は風景を楽しみながら少し歩くことにした。道の傍には自動車を修理する小さな工場があったり、田で稲刈りをする人がいたりするのだけれど、あまりにあたりが美しく静かで天気もよく、すべてが一つになって時間が止まってしまったような気がした。四十分くらい歩いたのだろうか、わたしはぼんやりしてしまってよくわからなかったけれど、Kさんが、

「家まで帰るには二時間はかかりませんから、次ぎのバス停で降りましょうか」

といたので、芳野川と道とが交差する白い橋を渡ってから、上伊足でバスを待った。

少し時間があつたのでコスモスに囲まれたベンチに座って残りのお茶を飲み、この風景に名残を惜しんだ。この近くの人が子どもを連れてバスに乗るために自転車に来て、停留所の近くの家の人と話していた。

水分の神を祀り、芳野川の輝く菟田野町は、いにしえ、神々がどのようにあつたのかを、言葉なく感じとらせられる、そのように温かく、なつかしい土地であつた。

苳蓮華を踏んで歩く者 一法華經巡礼 391 1989.11.28. 原 田 憲 雄

前号「譬喩品」長行、華光如来の「離垢」という仏国土の説明の続き。

「そこは平らかで、楽しく、きちんとしていて、最も見晴らしがよく、清潔で、ゆったりしていて、栄え、おだやかで、食料ゆたかに……」といった描写は、若い頃のわたしには、あまりにも物質的であるような気がして、厭わしく感ぜられた。貧しさのなかに精神性を見る傾きがあつたためであろう。いまでも絢爛豪華をおのれのものとして所有したり、贅沢な生活をすることは、落ち着かず、うれしくない。しかしひとびとが貧しいよりは、平等に豊かなほうがよいことはいまでもない。仏教經典が、物質の人間生活における重要性を無視しないで、仏国土にも、その豊かさを描くことを忘れていない意味を考えるようになった。ここに描かれるのは、經典成立当時の人達の願望が投影しているのであろう。瑠璃や黄金で造成される国が、生活環境として快適かどうかは疑

問だが、今日の見方からしても人間が平和に暮らすための主要な物質的条件がほぼあげられているようである。物質的条件がとつても、精神的に満足平穩となるとは限らない。つまり思うようにはならなくて、「苦」は終結せず、苦になやむ衆生は絶えない。とすると衆生の意識のありように合わせて、教えを三乗にわけて巧みに解き明かす法門の必要はなくならない。如来の仏国土は清らかなはずだが、衆生がいるかぎり、その欲望によって汚れは発生し、如来の教えに清められたカルバ、すなわち時代も、汚れざるをえない。「その如来は劫濁には生れないのだが」とは、仏の世界には一切の汚れは存在しない、ということを示すとともに、しかし衆生の立場からは絶えず汚れが生産されるので、その浄化のために、如来の誓願が衆生の汚濁に侵入することをいっているであろう。汚濁に侵入したとき、如来は「如来」としての姿をそのまま保つのではなく、衆生と同じ姿で現れるボサツとなる。

華光如来のカルバ、すなわち時代、が「大宝莊嚴」と名づけられるのは、右に述べたような如来の変形・変化によって如来の時代の本質が被われ飾られるからであろう。「宝」とはこの国では「ボサツ」のことなのだ、というのは、華光如来の誓願が無量無数のボサツの姿に化生し分化して、衆生のあらゆる状況に対応する、というのであるにちがいない。華光は、そのような如来であるから、衆生に対しては永遠に「如来」の姿では現れないで、衆生と同じ姿の「ボサツ」として衆生のなかにいる、ということをも「誓願」とする如来なのである。人間の論理学では矛盾かもしれないが、それが仏の論理であり、その仏の論理を「如来の計算」というのである。

「宝の蓮華を踏む」とは、歩いた足跡から蓮華が発生することをいう。「雑宝藏經」の「蓮華夫人」と「鹿女

夫人」は、ともにバラモンの仙人と女鹿のあいだに生れた女だが、蓮華夫人は「脚の地を踏む処、みな蓮華出づ」とあり、鹿女も、歩いたあとに蓮の花が咲き出すので、そのことを知ったバラモンの修行者が、鹿女に庵のまわりを歩いて十四重の蓮華の輪を描かせる。狩りに来てこれを見た王が「ここには池もないのに、どうしてこんなすばらしい蓮華がきみの庵をとりまいているのか」とたずね、修行者からいきさつを聞いた王は、鹿女をたずねて夫人にする。そんな話が語られている。イメージとして美しく、そのような不思議を実現する者として、この国のボサツが描かれているのが、おもしろい。余談ながら六世紀中国の、北齊の後妃のひとり、この真似をし、蓮華を植えさせ、そのうえをとんで歩いたことが、史書に見える。

離垢国のボサツが、梵行をおさめ、仏の知識に精励し、神通を陶冶し、法門に熟練しているほかに「前世を記憶していること」が強調されているのも、注目すべきである。「法華經」の法門は、「序品」で文殊の記憶を契機として展開されたのであった。すべての生物は、染色体に組み込まれた過去の記憶によって生命を維持発展させているそうだが、ボサツの記憶も、おそらくそのような深層に沈んだものなのであろう。

華光は如来ではあるが、永遠不変なのではない。寿命の長さは、十二アンタラカルバであるという。「アンタラカルバ」を、正本は「中劫」とし、妙本は「小劫」と訳す。カルバ、すなわち劫は、インドの時間単位の最長のもの。大小・増減があり、二十小劫が一中劫、三アサンキヤ（無数）を一大劫だといったりするが、われわれの数学で計りうる時間ではない。それでもやはり限界があり、カルバのなかでの如来の教えにも盛衰があり、如来の寿命の尽きた時、次の如来にバトンが渡される。如来の「諸行無常」の理の絶えざる体現である。